ブナ林からの贈りもの

文 熊谷 榧
写真 石橋睦美

世界文化社

ブナ林からの贈りもの

一九九三年七月一〇日　初版第一刷発行
一九九三年八月一五日　初版第二刷発行

著　者　熊谷　榧
　　石橋睦美

発行者　鈴木　勤

発　行　株式会社世界文化社
　　〒一〇二　東京都千代田区九段北四-二-二九
　　電話　〇三(三二六二)五一一一(代表)

印　刷　凸版印刷株式会社

製　本　大観社製本株式会社

©Kaya Kumagai & Mutsumi Ishibashi 1993 Printed in Japan
禁無断転載・複写
定価はカバーに表示してあります

定価 2000円

ブナ林からの贈りもの

文＝熊谷　樞
写真＝石橋睦美

世界文化社

はじめに

世界文化社の佐藤良和さんに、「ブナ林からの贈りもの」というテーマを与えられたとき、私は買ったままになっていた『原色樹木大図鑑』のブナのページをあわてて開いたほど、木について無知だった。そんな図鑑を買っていたのは、木について知りたいという意欲はあったのだが。

よく「獣(けもの)を追う猟師は山を見ず」と言われるが、今までの私もそうで、さしずめ「山スキーヤーは木を見ず」だった。ただ残雪の鳥海山のブナ林の新緑とか、月山(がっさん)の麓の池に映るブナのたたずまいとか、大峰山系の空を覆うブナの大木の紅葉とか、ときに心に残るブナの記憶はあった。しかし今まで私は山に登っていて、どちらかというと森林限界を過ぎた乾いた岩肌や、氷河の山のほうが好きだったのである。

今度日本の主だったブナの森を一〇箇所ほど回ることになって、初めて木々の姿が見えてき、息づかいが聞こえてくるようになった。種類や風土がちがうから、背の高さも葉の形も枝の伸ばし方も異なるが、いずれもがいかに効率よく太陽の光を浴びたがっているかを知って、生命の不思議に改めて思いいたった。若いころ、枝のつき方を数式で表せないものか、と考えたことなども思い出した。

『植物の神秘生活』という本を改めて読むまでもなく、われわれ日本人は木や林に対して恐れと懐かしさを昔から抱いてきた。ヨーロッパ人のように人間と動植物を画然と区別せ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ず、同じ命あるものとして自然をみてきた。

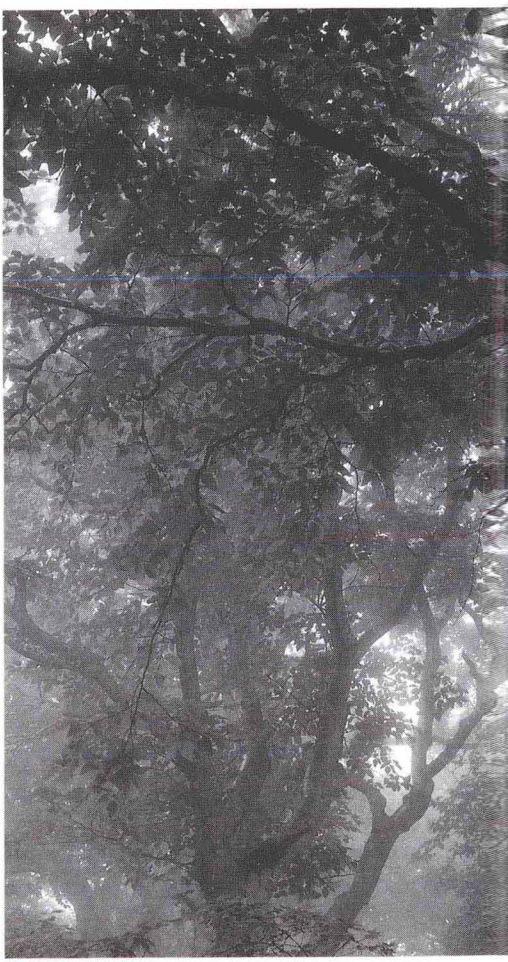
訪ねた森や林に懐かしさを覚えた。遠い日本人の祖先につながる安心感と言ったらいいだろうか。昔の人がなぜ山や森に手を合わせ、頭（こうべ）をたれたのか、その想いに少しは近づけた気がする。かれらは肌身に染みてわかっていたにちがいない。自分たちの生命が何によって支えられ、守られているのかをだ。それゆえにかれらは祈り感謝し、木々を大切にしたのだろう。

生命は互いに関連しあって存在している。人間も決して例外ではない。――昔の人の姿勢の根幹には、同じ命あるものとしてのこんな認識があったのではなかろうか。

確かに今われわれが呼吸している地球上の酸素はすべて植物が作ったものだそうだから、植物なしには人間や動物の生存は考えられない。ところが動物の頂点に立つ生きものとうぬぼれる人間が、われわれを育ててくれた自然を破壊してかえりみない。「ブナ林からの贈りもの」に気づかずにいるのだ。

梅原猛も言っている。

日本文化の基層にあるブナ帯文化は、ただ物質文明の問題のみならず、それは同時に精神文明の問題なのである。その文明の問題を深く考えるとき、ブナ林の生死もけっして今後の人類の生死と無関係でないことがわかるであろう。ブナ林を守るという運動は、同時に今後人類の生存にとって最も必要な思想をとり戻す運動でなくてはならないのである。（『ブナ帯文化』思索社刊）


鳥海山のブナ林

最後に忙しい中をブナ林に案内して下さった根深誠さん、志田忠儀さん、安野木正さん、奥田博さん、上馬康生さん、奥野幸道さん、小西毅さんほか多くの方々にお礼を言います。自然と折り合って暮らす人々の顔は、例外なくやさしく〝いい顔〟をしていた。文字どおり「ブナ林からの贈りもの」をないがしろにしない気持ちが、目つきや口元に表れていた人たちだった。ブナ林にひたることもそうだが、そうした人々に出会えたことが一番うれしい。そして、ブナ林、ブナ林と走り回る私につき合ってくれた、昔からの気のおけない友人たちにも一言お礼を言います。

一九九三年春

熊谷 榧

ブナ林からの贈りもの　目次

はじめに　3

第Ⅰ部　原生林をゆく——東北のブナ林　11

第一章　クマゲラの棲む森——白神山地（しらかみ）　35

第二章　恵みが息づく森——八幡平（はちまんたい）　57

第三章　サケが溯（さかのぼ）る源流の森——鳥海山　73

第四章　クマ撃ち名人の言い伝え——朝日連峰　89

第Ⅱ部　雪国の森と人と——日本海側のブナ林　107

第五章　ブナのある暮らし——白山（はくさん）　131

第六章　祈りの山は「野鳥」の森——大山（だいせん）　145

第Ⅲ部　山里の「森」便り——内陸のブナ林　155

第七章　森と折り合って——尾瀬・日光　171

第Ⅳ部　黒潮の風が届く——太平洋側のブナ林　187

第八章　森を愛する人がいて——丹沢　211

第九章　「森の人」に誘(いざな)われ——大台ヶ原・大峰山系　227

撮影を終えて　石橋睦美　243

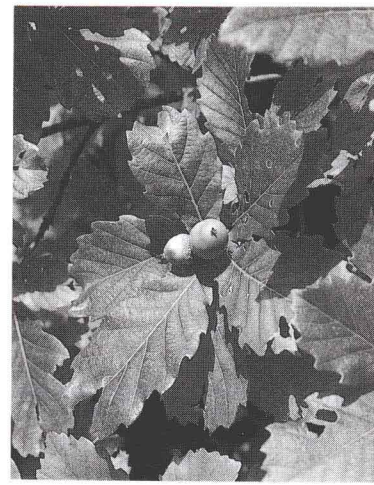
カラー写真撮影データ　245

カバー表＝初夏のブナ（尾瀬）
カバー裏＝晩秋のブナ林（大山）

表紙文字「ブナ」＝岡本光平
装幀・AD＝熊谷事務所
スケッチ＝熊谷　樞
扉カット＝矢田陽子
地図提供＝国際地学協会

ブナ林からの贈りもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



ミズナラ

ブナはブナ科ブナ属の落葉高木。日本にはブナ（シロブナ）とイヌブナ（クロブナ）がある。仲間は世界に六属ないし九属、七〇〇種ほど。日本にはブナ属のほか、クリ属、マテバシイ属、コナラ属、シイノキ属などがある。

分布の中心は温帯山地。わが国では北海道の渡島半島から鹿児島の高隈山まで。いわば「落葉する日本の森」の代表種といえる。なかでも「ブナといえば東北地方」と称されるように、冷温帯に多く自生する。

純林も東北地方を中心にある。が、〝ブナの森〟といえば、ブナをはじめ、ミズナラ、カツラ、ホオノキ、トチノキ、イタヤカエデ、サワグルミなどとの混交林がほとんど。

その森は動植物の宝庫である。豊かな生命を育む森なのだ。しかもその恵みは、古来、日本人の暮らしともかかわりが深く、果実は食料にされ、狩りや釣り、山菜採りやキノコ狩りの舞台となってきた。材は曲げものや道具類、薪や炭、まくら木、パルプなどの原料として活用された。

それに、この森自体が天然のダムの役割を果たし、水害や旱魃を防いでもきたのである。

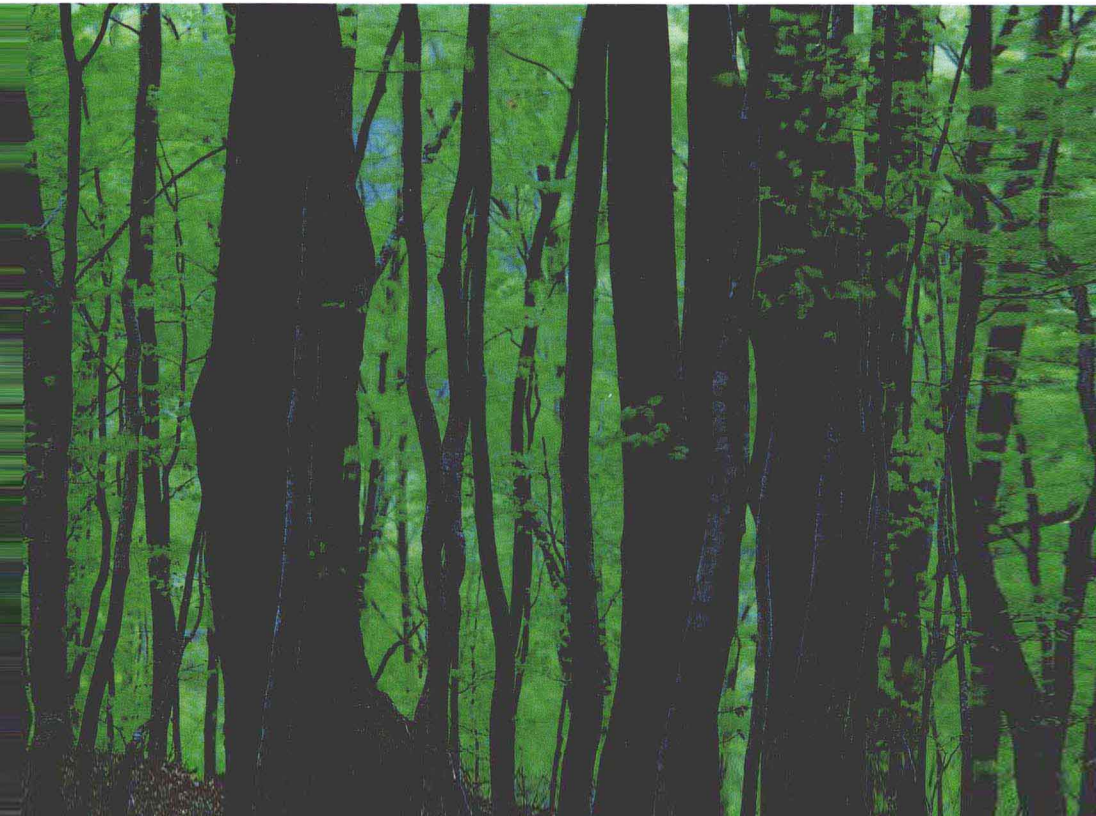
が、しかし……。国をはじめとする行政や企業による人工造林政策、道路やダム建設、リゾート開発などにより、今、この森は消滅の危機に瀕している。

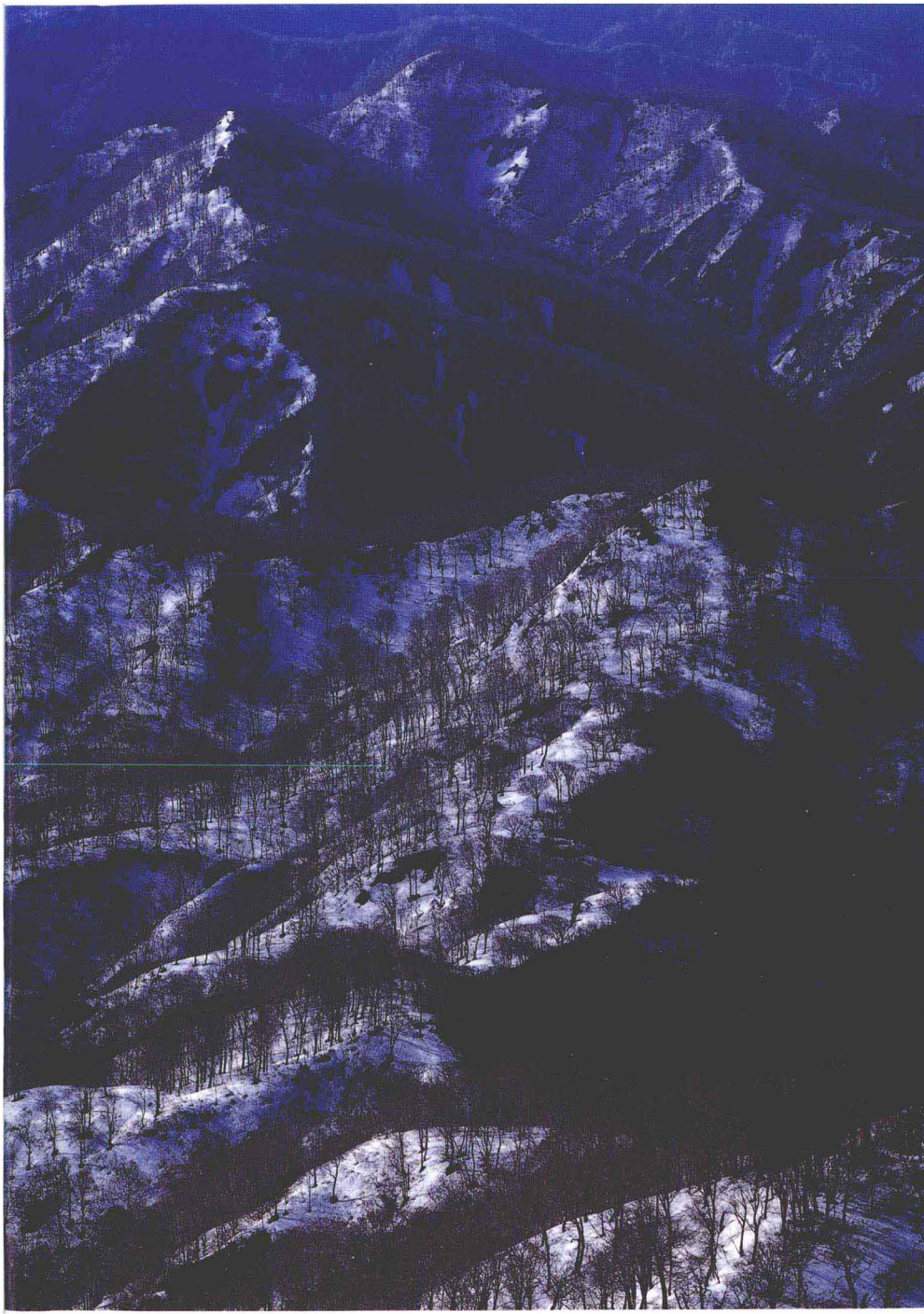
第I部

原生林をゆく

東北のブナ林

雨上がり、暮れなずむ森に一陣の風が(白神)





春近し。白神岳山頂からの世界に誇るブナ原生林(白神)

◀雨上がりの翌日、芽吹いたばかりのブナの森は生気に満ちあふれていた(白神)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com